

# 1. 体験学習をすすめるにあたって

## ● 「ふだんの 暮らしの しあわせ」を考える教育

福祉教育は、子どもたちが身のまわりの人々や地域との関わりを通して、そこにどのような福祉課題があるかを学び、その解決に向けて考え、行動する実践力を養うことを目的としています。

しかし、学習のねらいが曖昧なまま、車いす体験や高齢者疑似体験などを実施し、「体験すること」が福祉教育の目的となってしまう現状も見受けられます。「老いる」とはどんなことなのか、「障害」とは何か、というような問いかけを、体験を通してより具体的に考えることが重要です。

## ● 子どもたちの日常生活と結びつける

体験においては、子どもたちの普段の生活に関わりのある場所やものを用いることで、より多くの気づきが得られます。いつも通ったり使用する歩道の傾きやちょっとした段差、置いてあるものの高さなど、普段何気なく歩いたり見たりしているものを、体験を通して身をもって体感することができます。

例：校舎内（教室、廊下、トイレ、水道等）、校舎周りや登下校する通学路、最寄りの商店等

## ● 当事者の方や地域の方に協力してもらう

地域にはいろいろな方々が生活しています。福祉教育においては、実際に地域に住んでいる人との関わりが重要なポイントとなります。

子どもたちが身のまわりの人々や地域との関わりを通して、地域に住むさまざまな人々の生活に触れ、そこにはどのような工夫があるのか、またどのような生活課題、福祉課題があるのかを学ぶことが重要です。

しかし、学校の授業として取り組む場合、時間の制限や危機管理等の問題から自由に外に出ることが難しい場合が多々あります。地域によっては、子どもたちが外に出て体験する際に地域の方々に子どもたちを見守ってもらったり、付き添ってもらったりと、さまざまな場面で地域の方々にサポートしていただいているところもあります。福祉教育を進めるにあたっては、地域の方々と協力しながら学習をすすめていくことも大切です。

## ● 疑似体験はきっかけの1つ。一歩間違えると落とし穴に・・・

福祉教育における疑似体験は、あくまで「気づき」や「きっかけ」の導入の1つであり、一方的な知識定着や対象理解、技術習得が第一の目的ではありません。

福祉教育における疑似体験でもっとも危険なことは、安易な体験の実施により、子どもたちを「わかったつもりにさせてしまう」落とし穴に落としてしまうことです。

疑似体験では、子どもたちが車いすに乗ったり、高齢者疑似体験用具を装着したり、アイマスクを着用してブラインドウォーク体験をしたりすることで、障害のある人たちの生活の一部を疑似体験しますが、それはあくまでも疑似であるということを伝えることが大切です。

## ● 福祉教育の本来の目的を確認

一方的な疑似体験では、「大変だった」、「怖かった」、「不便だった」というようなマイナス面のみの感想が述べられ、「大変だから手伝いましょう、優しくしましょう」というまとめ、また感想文にとどまってしまいます。これでは、本来の福祉教育の意図とは大きく外れてしまいます。

点字や手話の学習も、それ自体を覚えることが第一の目的ではなく、耳の聞こえない、目の見えない（障害のある）人とコミュニケーションを図ることが本来の目的であるはずです。

## ● ふり返りを意識した展開を

子どもたちが体験を通して得た気づきや疑問を、丁寧にふり返り、深めることで、子どもたちにとって身近な地域課題・生活課題と結びつけ、それに対して「自分たちには何ができるのか」、「解決していくためにはどうすればいいのか」を子どもたち自身が考え、行動していく実践力を養うことではじめて疑似体験はその意味を成すともいえます。

体験のための体験にならないように、体験での学びを活かして、自分たちにできることは何かを子どもたち自身が考える過程が大切です。

この実践編の中では、福祉教育における取り組みのヒントをいくつかご紹介しています。いろいろなことに「気づいたり」「感じたり」「考えたり」するきっかけの一つとしてご活用ください。